窓の内と外

小川未明

青空文庫

白と黒の、ぶちのかわいらしい子ねこが、洋服屋の飾り窓のうちに、いつもひなたぼっこをしていました。そのころ、政一は、まだ学校へ上がりたてであった。その店の前を通るたびに、おもちゃのねこがおいてあると思っていました。ところが、ある日、そのねこが起き上がって、脊のびをしたので、

「おや、生きているのだな。」と、びっくりしました。

ねこを好きな政一は、それから、この洋服屋の前を通ると、かならず店のうちをのぞくようになりましたが、太陽の当たらないときは、ねこの姿を飾り窓では見ませんでした。

月日がたって、いつしか政一は、上級生となりました。彼は、また釣りが大好きなので、祭日や、日曜日などには、よく釣りに出かけました。だれでも、子供の時分は、魚釣りが好きなものですが、政一ときては、日に、二、三回もいくようなこともめずらしくなかったのです。それは、川がそう遠いところでなかったからでありましょう。片手にブリキかんをぶらさげて、片手にはさおを持ち、いつも帽子を目深にかぶって、よくこの洋服屋の前を通ったのでありました。

そのころは、とっくに、ねこがいなかったから、彼は、ねこのことなど忘れてしまいました。ただガラス窓にうつる、彼の姿が、学校へ上がりたてのころから見れば、おどろくほど大きくなっていました。思い出したように、彼はまぶしい空を見上げたが、釣りのことよりほかには、

なにも考えていませんでした。

　このとき、店のうちで、眼鏡をかけて仕事をしていたおじいさんは、じっと少年の姿を見送っていました。

「あのお子さんも、大きくなったものだ。しかし今日は、風向きがおもしろくないから、釣りはどうだかな。」と、おじいさんはひとり言をしたのでした。

　政一のお母さんは、よくこの店へきて、政一の洋服の修繕をお頼みになりました。ちょうど、その日の晩方のことです。いつものように、お母さんは、洋服屋へこられて、こんどは、政一が、新学期から着るための新しい服を、お頼みなさったのでした。

「いままでのは、もう小さくなって着られなくなりましたから、新しいのをこしらえてやろうと思います。」と、お母さんは、おっしゃいました。

　これを聞くと、おじいさんは、にこにこしながら、

「きょう、坊ちゃんがさおを持って、前をお通りになりましたが、釣れましたか。しかし、よく私の直してあげました服を、こんなになるまで我慢して着てくださいました。感心なことです。何分戦後で、品物がないのですから。」と、おじいさんが、いいました。

「このまえ、こんどこれが切れたら、新しくなさいと、念を入れて修繕してくださったおしりのところが、こんなに破れましたし、それに、急に体が大きくなりましたので、新しくこしらえてやろうと思います。」と、お母さんも笑って、お答えになりました。

おじいさんは、鼻先から、眼鏡をすべり落ちそうにして、うなずきながら、「坊ちゃんが、あんなに大きくおなりですもの、自分は年をとったはずだと、つくづく思いましたよ。」

おじいさんは、さらに、話をつづけました。

「私も、子供のときは、なにより釣りが大好きでした。それですから、いまでも、釣りざおを持っていく人を見ると、しぜんに癖で、空を見るのです。ああ、今日はだいじょうぶだ。今日は、風がおもしろくないと、つい、自分のことのように考えるのです。仕事をするようになって、もう何十年も川へいきません。けれど、こうしてすわっていても、昔を考えると、楽しかった日が、目に浮かんできます。」と、おじいさんは、政一のお母さんに向かって、話しました。

この日、政一は、おじいさんのいったように、わずかに小さなふなを二匹と、えびを三匹釣ったばかりでした。夕飯のとき、お母さんが、おじいさんの、今日の話をおきかせなされると、「たまには、おじいさんも、釣りにいけばいいのに。」と、考えて、政一は、こういいました。「それが、つぎつぎに、お仕事があっていけないのだそうです。おまえの、いま着ている服も、どれほどおじいさんのお世話になったかしれません。おじいさんだけは、直しものでも、けっしていやな顔をせずに、かえって、こんな時節だから、着られるだけ我慢なさいといって、喜んでしてくださるのですよ。」と、お母さんはいわれました。

政一は、お母さんの口から、こうはじめて聞くと、おじいさんが、自分の好きな楽しみも犠牲にして、他人のためにつくしているのを知りました。それぱかりでなく、政一は、自分の着ている服も、幾人かの手によってつくられたのであって、この世の中のことは、なに一つ、ひとりの力だけで、できるもののないことを悟ったのであります。

彼は、毎日、だまって仕事をしている人々に、真に感謝の念がわいたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「僕の通るみち」南北書園
　1947（昭和22）年2月
※表題は底本では、「窓《まど》の内《うち》と外《そと》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

窓の内と外

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/